むくげ通信 301 号 ２０２０．７．２６

歌・ノレ・노래 １７６

『行こう 白頭山へ』

山根 俊郎

歌謡『行こう 白頭山へ』

この歌謡『行こう 白頭山（ﾍﾟｸﾄｩｻﾝ）へ』は、現在、北朝鮮で最も歌われている歌である。

去る１月 25 日に開催された三池淵楽団のソル（正月）名節公演でも 10 番目に歌われて大いに盛り上がった。

この歌が歌われている時には大画面に金正恩（ｷﾑ･ｼﾞｮﾝｳﾝ）委員長が白頭山の山麓を白馬に乗ってさっそうと駆けめぐる映像が流されて、拍手大喝采。改めて「白頭の血統」の尊さをアピールした。「むくげ通信 299 号」P20-P24 参照。

この歌は、2015 年に作詞李志成（ﾘ・ﾁｿﾝ）、作曲禹正喜（ｳ・ｼﾞｮﾝﾋ）で創作されてモランボン（牡丹峰）楽団が女性重唱として歌った。作詞家 李志成は、2012 年からの金正恩時代に活躍している。

『革命武力は元帥様の領導だけ受ける』

（혁명무력은 원수님령도만 받든다

2013 年 作詞車浩根/李志成、作曲薛泰星/咸赫）や『社会主義 前進歌』（사회주의 전진가 2017 年作詞李志成、作曲金雲龍）など重要な歌を多く作詞している。

作曲家禹正喜は、女性の人民芸術家であり、万寿台芸術団所属で作曲を始め、1980 年代後半にポチョンボ電子楽団に移籍して、現在はモランボン楽団創作室室長を務めている。

主な作品は、『金正日花』（김정일화 1988 年作詞パク・ミソン〔박미성〕、作曲禹正喜、唄全惠英）やさわやかな口笛が印象的な軍歌『銀色の翼』（은빛날개 1994 年 作詞チョン・ソンファン〔정성환〕、作曲禹正喜）などがある。

歌集『行こう 白頭山へ』

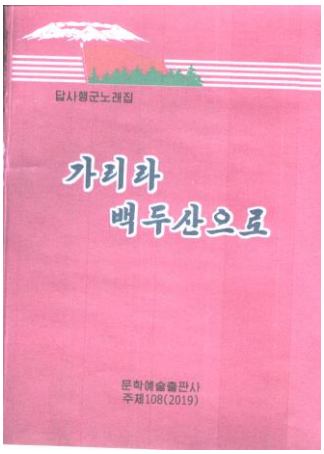
この歌の題名を冠した歌集『行こう 白頭山へ』が 2019 年に出版された。

「踏査行軍歌集 行こう 白頭山へ」

（답사행군노래집 가리라 백두산으로）

主体 108 年 2019 年文学芸術出版社発行

この新しい歌集も東京の音楽プロデューサー李喆雨（ｲ・ﾁｮﾙｳ）さんから貸していただき、コピーさせていただいた。いつも変わらぬご厚誼に感謝したい。



歌の題名を冠した歌集としては、「李鍾旿（ﾘ・ｼﾞｮﾝｵ）作曲集『私の国が一番好き』」（내 나라 제일로 좋아 1991 年 作詞崔俊景）が2014年に文学芸術出版社発行」以来の快挙である。

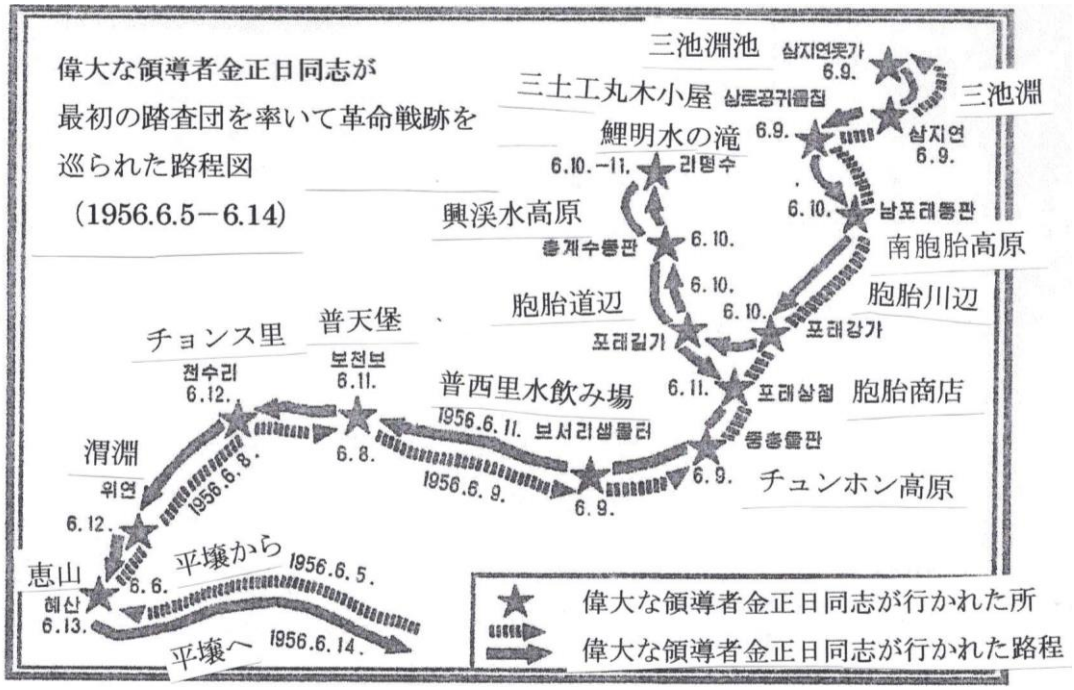
それほどに金正恩政権は、この歌を重要視しているのである。

最初に金正恩の署名入りで文章が掲載されている。「白頭山地区は我らの革命が根を下ろし千万軍民の心の柱である将軍様（故金正日（ｷﾑ･ｼﾞｮﾝｲﾙ）委員長を指す）の故郷の家があり、意義深い所である。

我らは白頭山地区を最上の水準で良く飾り、代を継いで、それを通じて教養事業を強化して人民軍将兵たちと人民たち、そして青少年学生たちを白頭の革命精神、白頭の刃の風の精神で堅固に武装させなければならない。金正恩」

実際に現地に行って歌う実用的な「踏査行軍歌集」なので内容は多彩である。行軍の合間に歌うのであろう。

抗日パルチザン時代の『赤旗歌』、『総動員歌』、『パルチサン追悼歌』。青少年のために『児童団歌』。ご当地ソングとして「白頭山」、「正日峰（ﾁｮﾝｲﾙﾎﾞﾝ）」、「小白水（ｿﾍﾞｸｽ）」、「三池淵（ｻﾑｼﾞｮﾝ）」、「普天堡（ﾎﾟﾁｮﾝﾎﾞ）」、「鴨緑江（ｱﾑﾉｸｶﾝ）」を歌った歌など合計 119 曲が収録されている。



最初の白頭山踏査団

上記に引用したとおり「偉大な領導者金正日同志が最初の踏査団を率いて革命戦跡を巡られた路程図（1956.6.5－6.14）」が序文の前に掲載されている。以下、金正日による最初の白頭山踏査について述べる。

参考資料：「金正日伝」（2004 年 著者 朝鮮・金正日伝編纂委員会、編集 チュチェ思想国際研究所、発行 株式会社白峰社）P72-P78

1956 年５月末のある日、平壌第１中学校に通う金正日は、（1942 年２月 16 日生まれなので満 14 歳）普天堡戦闘勝利記念日（1937 年６月４日）を契機に生徒による踏査団を組んで両江道内の革命戦跡地を踏査したいと金日成（ｷﾑ・ｲﾙｿﾝ）主席に話した。

主席はそれを積極的に支持し、革命戦跡地に行って抗日遊撃隊員が歩んだ道を踏査して見るべきだ。抗日遊撃隊員はあの困難な時期にも祖国に進軍して普天堡を討ち、茂山（ﾑｻﾝ）地区（1939 年 5 月朝鮮人民革命軍は三池淵から朝鮮に入った）でも戦った。革命戦跡地に行ったら抗日遊撃隊員がどのように必勝の信念を抱いて戦ったかをよく学んでくるべきだと教え聞かせた。正日は少年団踏査団を組織して踏査に必要な準備を十分に整えさせた。

1956 年６月５日、平壌第１中学校の生徒による白頭山地区革命戦跡地踏査団は正日の引率のもとに赤旗をなびかせ、朝鮮で初めての歴史的な革命戦跡地踏査の途についた。

６月８日、踏査団は革命戦跡地普天堡に到着した。正日は、金日成主席が普天堡戦闘の指揮所としたドロノキ（ﾄﾞﾛﾔﾅｷﾞの木）や襲撃目標になった警察官駐在所、消防会館、面事務所、郵便局、山林保護区の跡などを見て回り歴史の証言者のようにそびえ立つケヤキの下で踏査団員たちと記念写真を撮った。

６月９日、一行は普天堡を経ち密林の細く険しい道を踏み分けて三池淵の湖畔に着いた。水晶のように澄んだ水をすくって飲み、美しく咲き乱れるツツジを見て思いに浸った。正日は我が国の清い水、新鮮な空気はすべて三池淵に源を発していると思った。

翌日、６月 10 日は、林業村を発ち胞胎（ﾎﾟﾃ）里を経て鯉明水（ﾘﾐｮﾝｽ）にいたる 25 キロ余りの険しい山道をたどる困難な行程であった。

正日は抗日遊撃隊員を見習い、バスにも乗らずに隊伍の先頭に立ち、学友を励まして歩いた。

鯉明水に到着すると正日は踏査団員たちとともに林業村の質素な丸太小屋に宿所を定め、食事も労働者たちと一緒に寄宿舎の食堂ですませた。正日は、良い宿所をあてがうことができなくて恐縮する家の主人に、僕はこんな丸太小屋で生まれ育ったので生家に帰ってきたような気がする、感慨深いと言った。

６月 14 日、平壌に戻った正日は父に踏査団の活動について報告し、革命先達の息吹がみなぎる革命戦跡地が整備されていない実状と今後は整備して革命伝統教育に使うべきだと話した。

⇒金正日総書記は 1979 年５月に三池淵大記念碑の建設や 1987 年に白頭山密営・金正日の生家の「復元」に乗り出した。